

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 藤原克己

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



『徒然草』の〈貧〉と〈閑〉の思想(二)

藤原 克己

◎所有(欲)の否定―『徒然草』第一八段

人は、おのれをつづまやかにし、奢りを退けて、財を持たず、世を食らざらんとぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるはまれなり。

唐土に許由といひつる人は、さらに身にしたがへる貯へもなくて、水をも手して捧げて飲みけるを見て、瓢(瓢箪)といふ物を人の得させたりければ、ある時、木の枝に懸けたりけるが、風に吹かれて鳴りけるを、かしかましとて捨てつ。また、手に掬びてぞ水も飲みける。いかばかり、心のうちの涼しかりけん。

孫晨は、冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝には収めけり。

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ、これらの人(我が国の人)は語りも伝ふべからず。

※唐・李瀚撰『蒙求』「許由一瓢」の南宋・徐子光注(一一八九年頃)に「逸士伝、許由隱箕山、無盃器、以手捧水飲之。人遺一瓢、得以操飲。飲訖掛於木上、風吹漉漉有聲。由以爲煩、遂去之。」*許由は堯から天下の政治を委ねられて箕山に隠れ、俗事に汚れた耳を潁川で洗った。ちょうどそこに、巢父という隱者が牛に水を飲ませようと通りかかり、許由が耳を洗っている理由を聞いて、さらに上流に行つて牛に水を飲ませた(皇甫謐『高士伝』)。

同じく『蒙求』「孫晨藁席」の徐子光注に「三輔決録、孫晨字元公。家貧織席爲業。明詩一書。爲京兆功曹。冬月無被、有藁一束、暮臥朝収。」

※ほかに第三八、五八、九八(一言芳談)、一一三、一四〇段等参照。

○『徒然草』第一〇段

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。

よき人の、のどやかに住みなしたる所は、①さし入りたる月の色も、ひとときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきららかならねど、木立もの古りて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子、透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えて安らかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

おほくの匠の心を尽くして磨きたて、②唐の、大和の、めづらしくえならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで、心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。

③さてもやは、ながらへ住むべき、また、時の間の烟ともなりなん、とぞ、うち見るより思はるる。大方は、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。(下略)

※傍線②は第七二段にも「賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。

持仏堂に仏の多き。前栽に石・草木の多き。家の内に子・孫の多き。(下略)」。また傍線

③は白居易から『方丈記』へと継承されてきた住居観。

◎『徒然草』第七五段―心身永閑の思想―quietism?

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるるかたなく、ただひとりあるのみこそよけれ。(中略)

いまだ真まことの道を知らずとも、縁を離れて身を閑しんかにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ。「生活・人事・伎能・学問等の諸縁を息やすめよ」とこそ、摩訶止観にも侍れ。※前掲第二四一段末尾参照。

○モンテーニュ(一五三三〜一五九二)『エッセー』第一巻第八章「無為について」

遊んでいる土地は、たとい肥沃な土地であっても、役に立たぬ無数の雑草が生い茂るもので、これを役に立つようにするには、有益な種子を蒔いて、土地を使用しなければならぬ。(中略)精神もまたそのようなものである。何ごとかでそれを満たし、それを制御することがなかったならば、精神は茫漠たる想像の荒野を、あちこちと当てもなくさまよっぱかりであろう。(中略)

さきごろ私は、できるだけ他の事にわずらわされずに、私に残されたこのわずかな余生をひとり静かに送ろうと決心して、この家に隠棲したのであるが、そのときは、私の精神をまったくの無為にゆだね、精神をそれ自身のことのみ専念させ、それ自身のうちに安住させることくらい、精神にとって有難いことはないように思われた。精神は年とともに重みを加え、円熟したものとなり、将来、ますますその境地に安住することができるようになるだろう、と私は希望していた。しかるに、

無為は精神をあらゆる方向へ分散させる。(ルカヌス『ファルサリア』四の七〇四)

精神はかえって、逃げ出した馬のようなものとなり、他人のことに労するよりも百倍も多く自分自身のことことに労するのを、私は知った。精神は、順序もなく計画もなく、あとからあとから、奇怪な妄想を生み出すのであった。私はその取りとめのない妄想をゆっくり眺めるために、それらを書きとどめておくことにした。いつか精神がそれを見てみずから恥じるときもあるろう、と私は思っている。(松浪信三郎訳『新装版 世界の大思想5 モンテーニュ 随想録(エッセー) 上』河出書房新社1974 26〜27頁)

○『徒然草』第二三五段

主ある家には、ぬしすずるなる人、心のままに入り来ることなし。あるじなき所には、みちゆきひと道行人みだりに立ち入り、狐、きつね梟うみくさやうの物も、ひとげ人氣に塞せかれねば、ところえがほ所得顔に入り棲すみ、こたま木霊などいふけしからぬ形かたちもあらはるるものなり。

また鏡には色かたちなきゆゑに、よろづの影来たりて映うつる。鏡に色かたちあらましかば、映らざらまし。

虚空こくうよく物を容いる。われらが心に念々のほしきままに来たり浮かぶも、心といふものにやあらん。心に主ぬしあらましかば、胸の内に若干そくばくのことは入り来たらざらまし。

『徒然草』の〈貧〉と〈閑〉の思想（一）

藤原 克己

○河上肇『貧乏物語』（1965（初版1947）／岩波文庫）より

思うに貧乏の人の身心に及ぼす影響については、古来いろいろの誤解がある。たとえば艱難なんじを玉にすとか、富める人の天国に行くは駱駝の針の穴を通るより難しとかいうことなどあるがために、ややもすれば人は貧乏の方がかえって利益だというふうに考えらるる傾きがある。古い日本の書物にも「金持ちほど難儀な苦の多きものはない、一物有れば一累を増すというて、百品持った者より二百品持ったものは苦の数が多い」など言うてあるが、（中略）私だつて金持ちになるほど幸福なものだと一概に言うのでは決してない。しかし過分に富裕なのがふしあわせだからといって、過分に貧乏なのがしあわせだとは言えぬ。繰り返して言うが、私のこの物語に貧乏というのは、身心の健全なる発達を維持するに必要な物資さえ得あたわぬことなのだから、（下略）（39〜40頁／傍線藤原）

☆この傍線部のような思想は、白居易にも。また鴨長明の『方丈記』に「財あれば恐れ多く、貧しければ恨み切なり」。『徒然草』第三十八に「財多ければ身を守るに貧し（十分でない／「惑ふ」とする本も）。害を買ひ、累を招くなかだちなり」。

※河上肇は右の『貧乏物語』発表後、次第にマルクス主義に傾倒。昭和三年（一九二八）京都帝国大学教授を辞し、七年共産党入党、地下活動に入る。八年検挙。十二年出獄。二十一年（一九四六）一月逝去。六十八歳。

○岩波新書『日本人の死生観』下巻（1977）の「河上肇―自己中心の利他主義者」（加藤周一）、一海知義『河上肇詩注』（岩波新書1977）参照。

(藤原補足資料) 現代社会を考えるために

★現代日本の「貧困」の問題……湯浅誠『反貧困』(岩波新書 2008) 参照。

○グローバル市場経済の荒波…金子勝『反グローバリズム』(岩波書店 1999) 参照。

○希望…農業の再生と、グローバリズムに対抗する地産地消的な経済の振興。Sustainable な企業経営による新たなビジネス・チャンス。

◎足立直樹『2025 年 あなたの欲望が地球を滅ぼす 「激安・便利・快適」の大きすぎる代償』(ワニブックス【PLUS】新書 2010) より：

*足立氏は東京大学理学部および大学院で生態学を専攻、国立環境研究所、マレーシア森林研究所勤務ののち、サステイナブルな企業経営のためのコンサルタントとして独立、会社を創設。

○「序章：2025 年、最悪のシナリオ」…人類が CO₂ 排出量を大幅に削減できなかったために、産業革命以来の平均気温の上昇がプラス 2 度を超えたと想定すると、どういうことが起こるか。深刻な食糧不足。ハリケーン、サイクロン、早魃などの異常気象による災害の頻発。気象庁は気象用語を再定義して、気温が 40 度を超える日を「真夏日」とする。

○すでにオーストラリアでは長引く早魃の影響で、小麦の生産が半分以下に（山火事も頻発）。北米、西欧、中国の穀倉地帯でも乾燥化が進行。

○1Kg の肉を作るのに、鶏では 4Kg、豚では 6Kg、牛では 11Kg の穀物が必要。中国では食肉需要の急激な増加に伴い、大豆の輸入が急増。人類が排出する CO₂ 排出量の 15% を吸収する「地球の肺」と言われるアマゾンの熱帯雨林を伐採して大豆畑に。ブラジルは世界一の大豆輸出国になった。

○原料産地では先住民が土地を追われ、森林を伐採して作られた巨大プランテーションで児童や女性が酷使されている。こうして生み出される安価な原料による価格破壊。

※スーザン・ジョージ／小南祐一郎・谷口真里子訳『なぜ世界の半分が飢えるのか—食糧危機の構造』(朝日新聞社 1984) 参照

○東南アジアでは、マングローブ林（これも CO₂ 吸収量が多い）を伐採してエビの養殖池を作ったが、高密度の養殖のため池水が富栄養化し、また病気の発生を防ぐために抗生物質を大量に投入したあげく、養殖池が全滅し、今ではエビの産地は南米に。日本では相変わらず安いエビを大量に消費（私も！）。

○大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会…原産地の環境と人々の生活を破壊しながら生産された原料による激安ハンバーガーなどを無自覚に消費することの罪。

○ハイブリッド・カーや電気自動車の蓄電のために用いるニッケル水素電池の原料は日本では採れないレアメタル。中国やアフリカでのその採掘が環境にかける負荷や、原産地の地域社会に与えている影響まで考えると、ほんとうに環境にやさしいか。また、たとえ車

1 台の燃費はよくても、車の台数が増える限り CO₂ 排出量は減らない。

○地球環境が直面している深刻な危機を認識した世界の良識ある国々（残念ながら日本はその中にはいるとは言えなさそう）や企業は、将来の持続可能な社会や企業経営の構築に向けての取り組みを始めている。イギリスでは、企業が政府に気候変動に関して規制強化や積極的な政策を求めたため、2007 年、世界で初めての「気候変動法」を施行。国内の CO₂ 排出量を 2020 年までに 1990 年比で 26~32%削減、2050 年までには 60%以上削減するという明確な数値目標を設定。

○スウェーデンのハンバーガー・ショップ Max は、2007 年、自分たちのビジネスの CO₂ 排出量を牧場にまで遡って調査、自社の排出する CO₂ 排出量のすべてを東アフリカでの植林によってオフセット。商品に使う魚はすべて MSC 認証（水産資源や海洋環境を守って獲られた水産物に与えられる認証）を受けたものを使用、全従業員に Max 環境学校で環境教育を受けさせ、店舗の照明はすべて LED にする。こうした姿勢が消費者からの高い評価と支持を得て、競争相手よりはるかに高い利益率を維持。環境保全にコストをかけることが、かえって企業収益の向上につながった好例。

○2009 年、ユニリーバはリプトンのティーバック紅茶の茶葉を、2015 年までに Rainforest Alliance（環境保全、農業従事者への公正な待遇、持続可能な農園管理など多くの基準を満たす農園にのみ認証を与えている非営利環境保護団体）が認証する茶園で栽培された茶葉に 100%切り替えると宣言。

*ユニリーバ（Unilever）は、食品・トイレタリーなどの家庭用品メーカー、オランダとイギリスに本拠を置く巨大多国籍企業。紅茶のリプトンや LUX（石鹸等の toiletry）など多数のブランドを有する。（Wikipedia による）

○足立氏は、市場経済の効率性・合理性を肯定。ただしグローバル市場の危険性を警告。

○デンマークは、かつてエネルギー供給の海外依存率は 90%（日本は 96%）だったが、1973 年のオイルショックを機に石油に依存しないエネルギー供給への転換を図る。当初は原子力発電推進であったが、反原発運動により 1985 年には脱原発にシフト、翌年のチェルノブイリ原発事故により原子力発電計画は完全凍結、風力発電などの再生可能な（涸渇しない）自然エネルギーを中心としたエネルギー自給自足をめざす。1999 年にはエネルギー自給率 118%達成。ドイツも同様の方向に。

○スウェーデンでは、首都ストックホルムの下水処理場で発生するメタン（CO₂ の 21 倍もの温室効果を有する）を精製してエネルギー供給、バス、自動車の燃料としても使用。ストックホルムでは、すでにバスの 25%が再生可能エネルギーを使用。

○日本の再生可能エネルギーの割合は 0.96%。

○「このところの不景気で幸せになったという話も聞きます。夜中まで残業する必要はなく、家族と一緒に夕食を囲み、節約のために家の庭で野菜を作る。今までは買ってきてい

たものを、休みの日に自分で作ってみる。そのことで、本当の豊かさを感じるようになったという声を、実際に聞くようになりました。」(216頁)(以上、すべて足立氏前掲書より)

◎菅野典雄『美しい村に放射能が降った』(ワニブックス【PLUS】新書 2011)

*著者は昭和 21 年(1946)飯館村生まれ。帯広畜産大学を卒業後、郷里で酪農を営みながら飯館村公民館長を努め、村長に。

○「平成の大合併」と言われるように、市町村合併が急速に進むなか、菅野村長はあえて飯館村独自の村づくりを決断。さまざまな村おこしの取組みを通して飯館村を、他の自治体からも見学者が訪れるような、美しくて元気な村にした(しかし 2011 年 3 月の東京電力福島第一原発の爆発により、村の全域が計画的避難指示区域に指定される)。

○菅野村長は、過剰な都市化とは異なる「地産地消や心の豊かさ」を目指して、「スローライフ」の標語を掲げたが、「スロー」という言葉に村民が違和感を抱く。その時、ある農民が「そのスローライフって、までい、ってごどなんじゃねーべか」と言った。「までい」は、左右の両手を意味する「真手」の方言。丁寧に、大切に、心をこめて、思いやりをもって、などの意。大量生産・大量消費・大量廃棄型の大都市型市場主義に代わる、「地産地消」型の、物を大事にし、心豊かに生きる生き方を表す標語として「までいらいふ」を提唱。

◎見田宗介『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—』(岩波新書 1996)

◎水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』(集英社新書 2014)

超低金利の長期化➡もはや世界には利潤をあげる空間がなくなっている。

これまでの「途上国」を犠牲にした「先進国」の豊かさ➡先進国内部での貧富の格差の構造化。圧倒的多数の中間層の没落。

「地理的・物的空間」で利潤をあげることができた 1974 年までは、資本の自己増殖(利益成長)と雇用者報酬の成長とが軌を一にしていた。しかしグローバリゼーションが加速し、雇用者と資本家は切り離され、資本家(投資家?)だけに利益が集中(40頁)

「実質経済」➡グローバルな電子・金融市場(実物経済の数倍・数十倍のマネーが電子・金融市場を流動(45頁)*「実物経済」はかつては貨幣経済に対する用語?

資本主義は「周辺」の存在が不可欠。途上国が成長し、新興国に転ずれば、新たな周辺を作る必要。それが、アメリカのサブプライム層、日本の非正規雇用者。

非正規雇用者が雇用者全体の三割を超え、年収 200 万円未満の人が給与所得者の 23.9%(190 万人)(2012 年)(131 頁)

バブル➡崩壊➡公的資金注入と個々の会社のリストラ

《グローバル資本主義とは、国家の内側にある社会の均質性を消滅させ、国家の内側に「中心/周辺」を生み出していくシステム》(166 頁)

《「より速く、より遠くへ、より合理的に」という近代資本主義を駆動させてきた理念

もまた逆回転させ、「よりゆっくり、より近くへ、より曖昧に」と》(208 頁)

◎^{もたに}藻谷浩介・NHK 広島取材班『里山資本主義—日本経済は「安心の原理」で動く』(角川 one テーマ 21、2013)

岡山県真庭市。製材業で栄えて来た町。木材の製造過程で出る大量の木くずを燃料にして発電 (オーストリアに倣ったもの)。

山の木は、定期的に伐採したほうが、日光が十分に差し込むようになり、若い木や下草の盛んな光合成 (二酸化炭素の吸収を促す)。